The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ演劇の誕生と発展 : 18, 19世紀の演劇事情
Author(s)	田川, 弘雄
Citation	大阪外大英米研究. 1987, 15, p. 207-220
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アメリカ演劇の誕生と発展
―18，19世紀の演劇事情―

田　川　弘　雄

アメリカ演劇を語る場合，1916年のプロビンスタウンに於けるユージン・オニール（Eugene O' Neill）の劇的な登場から始める場合が多い。せいぜい遡っても，今世紀の初め迄であり，クライド・フィッチ（Clyde Fitch）やバン・ムーデイ（Vaugham Moody）の名が挙がるのがやっとのことだろう。時としてヘンリー・ジェイムス（Henry James）やウイリアム・デイーン・ハウエルズ（William Dean Howells）が劇作に興味を示したことが示唆されることはあるが，体系的に初期のアメリカ演劇が論じられたことは少ないと思う。

映画もテレビもない時代であり，スポーツも今日のように興行化されていない時のことだから，娯楽としての演劇は隆盛を極めたと思えるし，シェクスピアの伝統を持つ英国人が国民の中心を形成している米国において演劇が育たぬ筈はないと思える。

研究としては，アーサー・クイン（Arthur Hobson Quinn）の「創始から南北戦争に到るアメリカ演劇」（A History of the American Drama from Beginning to the Civil War）などはあるが，日本ではこの方面の研究は少ないと思えるので，紹介の意味を込めてこの稿を草する。

アメリカで演劇が初めて上演されたのは1598年，今のテキサスのエルパソの近くでスペイン系の移民者達が演じた喜劇だとも，1606年ポート・ロイヤルにおけるフランス人によるものだとも言われているが，18世紀に入るまでは職業劇団の登場はなかったようだ。1716年バージニアのウイリアムズバーグに植民地初の劇場が建てられ，1724年フィラデルフィアに，また1732年にはニューヨークに劇場ができた。1749年に，マリ・キーン劇団（Murray-Kean Company）

が最初の職業劇団としてフィラデルフィアで公演し，その後でバージニア喜劇団（the Virginia Company of Comedies）として活躍した。南部植民地ではこのほかにも，1735年にチャールス・タウンでトマス・オトウエイ（Thomas Otway）の孤児（The Orphan）が上演された記録もあるなど，上流階級の人々の独占物の感はあったが劇の愛好者は多かった。

だが北部では事情が違っていた。ピューリタンやクエーカーは偶像崇拝反対や娯楽を悪と見る立場から劇には好意的ではなかった。それでも劇を愛する人々はいろいろ工夫を凝らして演劇活動をしていた。例えば1761年にニューイングランドでオセロ（Othello）が上演された時に「誤解され夫に絞め殺された貞淑な妻に関する道徳的対話（moral dialogue)」としているし，1760年にロード・アイランド州のプロビデンスに劇場ができた時には a school house と呼んでいた。この当時，このような制約の中でおこなわれた演劇に似た活動に The Lectures of the Heads というのがある。これは講演ではあるが衣装を替えて何人かの役を演じるものである。また大学の卒業式に対話劇（Dialogue）が演じられ，中でも有名なのは1762年にフィラデルフィアのカレジで行われたフランシス・ホプキンソン（Francis Hopkinson）による「対話と頌詩を含む習作」（An Exercise Containing A Dialogue and Ode）で後に独立宣言書に署名したホプキンソンが英国王ジョージ三世に忠誠心を述べているのも興味深い。また1782年にダトマス・カレジで上演されたジョン・スミス（John Smith）による「英国人とインデアンの対話」（A dialogue Between an Englishman and an Indian）も有名で，英国人のインデアンに対する偏見と，これに対するインデアンの反論があり，劇に近くなっている。対話劇から普通の劇にいたる過渡期的作品といってもいいのがロバート・マンフォード（Robert Munford）大佐による「候補者」（The Candidate）である。「バージニア選挙のユーモア」と副題があるように，18世紀後半のバージニアの選挙風景をひどい買収と供応に風刺を交えながら描く三幕九場の劇である。1798年に出版されているが，もっと早く書かれたようである。

1752年にロンドンの演劇界の名門であったルイス・ハラムズ（Lewis

Hallams）が家族，兄弟と十人の俳優を連れて渡来し，シェクスピア劇を主な出し物にバージニアで活躍し，初代大統領ジョージ・ワシントンも若い副官の時代に彼等のファンであったということである。ルイスの死後，その未亡人と結婚したデビッド・ダグラス(David Douglass)に率いられ，ジョン・ヘンリー（John Henry）という人気俳優を得てますます活躍し，フィラデルフィアにサウスワーク劇場を建て，さらにニューヨークにジョン・ストリート劇場という朱塗りの60フィートの高さのある立派な劇場を建設した。18世紀も半ばを過ぎると演劇活動も盛んになり，風紀問題や火事などの危険を心配する役所の規制により消長は見るものの，民衆の間に定着してきた。そしてアメリカ人によって書かれた劇も登場してくる。まだ独立する前だから植民地人によると言う方が正しいだろうが，最初にアメリカ人によって書かれた劇はトマス・ゴッドフリイ（Thomas Godfrey）による「パーシャの王子」（The Prince of Parthia）であるとされている。この劇は作者の死後4年たった1767年にダグラスの劇団により上演された。「中近東のある王国パーシアの王子アーサクス（Arsaces）が戦いに勝利を得て帰国するが，その名声を妬み，また捕虜の美女エバンテ（Evanthe）をめぐる恋に敗れたことを怨みにおもう弟バーダネス（Vardanes）が，奸知に長けた腹心と計り，兄を獄に捕らえる。アーサクス王子は末弟ゴタルゼス（Gotarzes）に救い出されるが，一時王子の死が伝えられ，それを信じたエバンテは毒を仰ぐ。助けられたアーサクスが駆けつけた時には死んでいた。これを果敢なんだ王子も命を絶つ。王国はゴタルセスにより継承された」という梗概でもお分かりのようにシェクスピアやアジソンなどの劇のさわりの部分を寄せ集めたような作品だが，アメリカ人による劇が初めて職業劇団によって上演されたことには意味があるだろう。

独立戦争後も1778年の議会は観劇の禁止を解除しなかったが，劇は不死鳥のように復活し，1787年にはアメリカン・カンパニィ（The American Company）によって本当の意味におけるアメリカ人による最初の劇，「対照」（The Contrast）が上演された。作者ロイアル・タイラー（Royall Tyler）はボストン生まれでハーバード，イエール両大学で教育を受け，後にバーモント州の最高裁

判所の判事になり，また革命軍の軍人でもあったという生粋のアメリカ人である点でもアメリカ的であるが，舞台がニューヨークであり，登場人物がこの新しい国の市民であることに意義があると思える。

「対照」的な人物が登場する。マライア（Maria）は服装に気を使うぐらいならば読書に励むほうが良いという真面目なインテリ女性，シャロッテ（Charlotte）は「私が服装に凝るのが男性を楽しますため。私のスカートの一揺りで男は皆ついてくる」[1]という派手ずきな娘。マライアの婚約者デンプル（Demple）は英国最貴の伊達者。シャロッテの兄マンリー（Manly）は全く生真面目な軍人。このマンリーがマライアを愛し，デンプルが賭事で財産を無くし金持の女性と思えるリチシャ（Letitia）と結婚しようとするので事は複雑になる。スキャンダルの暴露のしあいなど典型的な風習喜劇として筋が展開して，最後はマライアとマンリーのカップルのハッピーエンドとなる。

シェリダン（Richard Brinseley Sheridan）の「悪口学校」（The School for Scandal）の焼き直しなどとの酷評もあるが，マンリーの従者ジョナサン（Jonathan）というヤンキーの原形を作り出したところは大きい功績だと思える。ジョナサンは劇場を教会と思い込んだ田舎者だが，気位高くユーモアのセンスもありヨーロッパにはない人物像になっている。作者タイラーは才人で「ジョージアの投機——月の土地」（The Georgia Spec. or Land in the Moon）（1797）などの劇や小説，書翰体の物語集もある。ロンドンからニューヨークに来た人が，空気があまりきれいなので堪り兼ねて，鍛冶屋にこもって火を焚き煙を吸ってロンドンの感じをだしたという話は面白い。

独立後，愛国心を鼓舞する劇が多く書かれ，とりわけ独立戦争に材をとった劇が多い。早くも1773年にはウオレン夫人（Mrs. Mercy Otis Warren）が植民地の総督トマス．ハッチンソンを攻撃した「おべっか使い」（The Adulatur）を，1775年には王党はを非難した「仲間」（The Group）などが出ているが，バーク（John Daly Burk）の「バンカー・ヒル——ウォーレン将軍の死」（Bunker-Hill or The Death of General Warren）（1797）が最も優れていると言われている。

マサチューセッツ州のバンカー・ヒルに立て籠もり勇猛果敢に英国の大軍を撃退したウォーレン将軍が敵の銃弾を受け死ぬ感動的な場面が描かれている。

「ウオレンは義務を果たせり。アメリカ，わが祖国，神よ，祝福あれ，この地を守らせ給え。意識朦朧，死来る。共和国よ，永らえよ，生き続けよ，永遠に！」[2)]

まったく愛国的な劇で当時人気があったのが頷ける。

ウイリアム・ダンロップ（William Dunlap）の「コロンビアの栄光」(The Glory of Columbia, Her Yeomanry)(1803) も独立戦争時にスパイとして捕らえられた英軍将校アンドレ（Andre）の処刑をめぐって人情と国益の間に悩む人々を描いた自作の韻文劇を書き直したものと言われ，アメリカの農民兵の強さを讃えた愛国劇で，男装の女性兵士の登場などもあって面白い。ダンロップはワシントン大統領の肖像画を描くなど，画才がある人で「コントラスト（対照)」の舞台装置に関係したことを契機に劇作に入ったと言われ，翻訳や脚色も多く，56編の作品がある。「ナイヤガラへの旅」(A Trip to Niagara) (1828) ではハドソン河を遡る船旅をパノラマと動画を用いて見せるなど新趣向を考案し，劇場経営の手腕もあった。晩年には歴史書にも筆を染め，「アメリカ演劇の歴史」(The History of the American Theatre)(1832) という貴重な書物を残している。

愛国劇という意味ではサミエル・ウッドワース(Samuel Woodworth)の「森のばら」(The Forest Rose—American Farmers)(1825) もその一種である。アメリカの農民と副題が付いているように，オクラホマの健康で明るい農民の生活を描いたミュージカル風の喜劇だが，英国人の思い上がりと好色ぶりをからかう風刺がよく利いている。たわいのない恋のトリック，間違いの面白さもあって興行的にも大成功で40年にわたり各地で上演され抜目ないヤンキーを演じるのを得意とする専門俳優も出てくるほどだった。人気の大きな理由は根底にアメリカ民主主義への愛国的賛美があることだろう。

1824年には19世紀アメリカ演劇の傑作の一つといわれるバーカー（James Nelson Barker）の「迷信」(Superstition) が上演された。牧師レイブンワー

ス（Reverend Ravensworth）の宗教的不寛容さと自分だけが正しいという頑くなさが，自分の娘の恋人を宗教裁判で死刑に追い込み，娘をも失わせることになる。狂熱，迷信の怖さを描いているが，娘メアリー（Mary）の恋人チャールス（Charles）がメアリーの名誉を守るために自分自身の弁明を諦める心理的葛藤もあり，20世紀の作品，特にアーサー・ミラー（Arthur Miller）の「るつぼ」（The Crucible）に影響を及ぼしていると言われる[3]。この劇は歴史的事実に基づいている無韻劇だが，いろいろな事件が巧みに組み合わされて，主人公チャールスを確実に不利な方向に導いて行く手法は当時としては出色のものである。

歴史劇の一つの流れとしては，インデアンとの争いを描いた作品もありJ.A.ストン（John Augustus Stone）の「メタモラ」（Metamora）（1829）が初期の代表作と言える。インデアンの勇士ウァムパノグス族の首長であるメタモラの壮烈な死をうたいあげた哀歌だが，白人の侵略の暴威に曝されたインデアン全体のエレジーでもある。悪いイギリス人と立派なインデアンとを対比させ，メタモラの妻を女として，また母としての理想像として描き，良きインデアンのイメージをつくりあげ，後年のジョン・ブローム（John Brougham）による人気バレスク「ポカフォンタス」（Pocahontas）（1855）に登場する気高いインデアン乙女へと受け継がれていくのである。「メタモラ」は当時の名優エドウイン・フォレスト（Edwin Forrest）が自分の嵌まり役を求めてやった劇作コンテストの入選作品であることも意味深い。俳優の人気もさることながら，コンテストと言うことで前人気も高く興行は大成功であり，19世紀中にインデアンを扱った劇が75編書かれたというが，その中でこの劇が一番長命で，それ以後40年間フォレストがこの役を演じると必ず満員になったという。歴史劇といっても，アメリカの歴史ではなく，ローマなど古代ヨーロッパを扱った作品も多く，1818年にはブルータスを描いたペイン（John Howard Payne）の劇が上演されロンドンでも好評であったし，1831年には「剣闘士」（The Gladiator）と題するロバート・バード（Robert Montogomery Bird）の劇が公演されている。この作家もフォレストの作劇コンテストの常連の入選者で「剣闘士」の主

登場人物スパルタカスは，またフォレストの当たり役になり，彼は1854年までに1000回以上もこの役を演じたと言われる。ローマ人の非人間的な扱いに反発し，人々を結集して戦いを挑み一度は勝利を収めながら，内部の団結が破れたために戦況不利になり，妻も子も殺され，自棄になって敵軍に打ち入り戦死する勇士スパルタカスの姿をダイナミックに描いている。このローマの虐げられた人々とアメリカの奴隷の運命が二重写となっているように思え，黒人問題を扱う劇の先駆となっている。

黒人問題の劇の代表はなんといっても「アンクル・トムの小屋」(Uncle Tom's Cabin)であろう。ストウ夫人の小説は1852年の春に出版されたのだが，夫人は劇といものはキリストの正しい教えを伝えるのに十分道徳的ではないという理由で劇化に反対した[4]。しかし奴隷問題が人々の大きな関心事であった時にこのような劇化の良い題材を見逃す筈はなく，多くの人々が勝手に劇にし，400～500ぐらいのグループがアメリカを巡り大儲けをしたと言う。本式の劇化はニューヨーク州トロイのトロイ・ミュージアムのマネージャーであった G. C. ハワードが22才の甥ジョージ・エイキン (George L. Aiken) に依頼して書かせたもので1852年9月に上演された。大変な人気で客の求めに応じて続編を出し，300回位のロング・ランをした。

1856年奴隷制反対の世論が盛り上がっている中で，混血の美女ゾオゥ (Zoe) の薄幸な運命を描いた「オクトルーン」(Octoroon) がブシコウ (Dion Boucicult) によって書かれ人気を博した。タイトルどうり，8分の1の黒人の血をもつ女性，外見は殆ど白人と変わらない気立ての良い娘であるため，フランスからやってきたプランデーションの相続人に愛されるが，横恋慕した悪人のために競売に出されることになり，運命を果敢なんで毒を仰いで死ぬという悲話である。ただ真剣に黒人の差別問題を追求したというより，当時イメージが定着しかけていた立派なインデアンを登場させたり，ミシシィピィ河の河船の火事という見せ場を作ったりして良いショウに仕立てようとする意図の方が強かったようである。ブシコウは時事的テーマを扱って良いショウを作るのが巧みで，1857年の作品で，恐慌のために貧苦に喘ぐ人々を描いた「ニューヨー

クの貧民」(The Poor of New York) というのがあり，心清き貧者と卑怯な金持とを対比させて，社会に問題を提起する真面目な劇になる可能性をもっていたが，結果は火事，嵐など舞台の上に再現し観客の目を見張らせる娯楽的スペタクルになってしまった。

社会批評といえば，パリの流行にかぶれるニューヨークの人々を強烈に風刺した女優兼作家モワット (Anna Cora Mowatt) の「ファッション」(Fashion) (1845) を挙げねばならない。

ニューヨークの商人ティファニィ (Tiffaney) 氏は成り上がりの金持である。彼の妻はト書に「ファッショナァブルであるとおもっている女性」と記してあるように，フランスかぶれが酷く，家具調度は勿論のこと，黒人のボーイにもフランス風の制服を着せ，フランス人のメイドを雇いフランス風マナーを指導させる有様であった。この家にフランス貴族と称する男が近づき夫人の歓心を買い，娘セラフィナ (Seraphina) の婿になろうとしている。勿論目的はこの家の財産である。一方ティファニィ氏も娘を腹心の秘書に与える約束をさされている。というのも彼に文書偽造の罪を知られているからだ。フランス人が贋の貴族であり，ティファニィ夫人のメイドの恋人であることが暴露される。逃げる前の一仕事に娘セラフィナと駆け落ちをして彼女の宝石を奪おうとするが，ティファニィ氏の経済的苦境のために宝石は差し押さえられていて失敗に終わる。結局，ティファニィ氏の友人で純朴で思慮深い理想的なアメリカ人ツルーマン (Adam Trueman) が登場してこの家庭の苦境を救う。

典型的な風習喜劇であり，見え透いた擦れ違いなどの陳腐な手法なども多く使われ不満は有るものの，フランスかぶれへの風刺も余裕がある椰揄で，同じヨーロッパ批判でも50年前の「コントラスト」のイギリス攻撃よりも随分と洗練されて，アメリカ演劇の進歩を感じさせる。エドガ・アラン・ポー (Edgar Allan Poe) も手法の陳腐さに不満を感じながらも「ファション」には良き面もあり，多くの点でいかなるアメリカの劇よりも優れている」[5] と述べている。

本当の意味で社会問題を論じた劇は1890年代のジェイムス・ハーン (James A. Herne) のマーガレット・フレミング (Margaret Fleming) (1890) や「海

辺の土地」(Shore Acres) (1893) まで待たねばならない。「マーガレット・フレミング」は夫に他の女性との間に子供があることを知らされながら，冷静に問題を処理する賢明な女性の姿を描いているが，イブセン劇にも似たリアリズムはまだ時代に先がけ過ぎていて興行的にはハムリン・ガーランド (Hamlin Garland) などの支援にもかかわらず不評判であった。

劇作家，俳優，興行者の三役をこなしたハーンが自分も公衆をも満足させた作品は「海岸の土地」であった。メイン州であった土地開発問題に材を採り，開発ブームが如何に人々の心を荒廃させるかをリアルに描いたもので，金儲けに狂奔する人々と対照的に，人間の善意と愛情を信頼する老人ナット (Uncle Nat) を配することにより劇に深みを与えている。またト書きが詳しくなり，人物の心理にまで指示を与えており，20世紀のリアリズム劇誕生への胎動が感じられる。

19世紀の後半の大事件南北戦争に素材をとった劇も当然多く，南部の乙女をめぐる北軍の将校の恋の鞘当てを描いたウィリアム・ジレット (William Gillette) の「敵にとらわれて」(Held by the Enemy) (1886) やスパイ劇として有名な同作者による「諜報機関」(Secret Service) (1896) などもあるが，奴隷とか戦争の問題とかに真剣に取り組んだ作品は少なく，19世紀最後の年1899年に上演されたジェイムス・ハーンの「グリフィス・デベンポート」(Greffith Devenport) など少数に限られている。南北戦争を主題にした劇で代表的なものはブロンソン・ハワード (Bronson Howard) の「シェナンドウ」(Shenandoah) (1888) であろう。ハワードは当時のアメリカ演劇界の重鎮で，俳優でも劇場支配人でもなく，劇作一筋に生きた人で劇作の仕事に誇りを持ち，また著作権の法制化へ努力した人でもあり，歴史的事実をよく調べて書くという実証的態度を貫き，「シェナンドウ」もミシガン大学で資料を調べて書いたものである。ウェスト・ポイント士官学校のクラスメートとその妹達との二組の恋愛は南北戦争が起こったため妨げられ，戦争の激化と，戦いの利，不利により四人の運命も変わっていくが，戦後二組の恋人は再び結ばれるという筋である。いろいろの事件が入り組んで話は複雑でイヤゴ，オセロやハムレットに

似た人物も登場する大芝居である。近代劇とは言えないが，戦争場面の迫真性は凄く，バレスク一辺倒であった当時のアメリカ劇の水準は超えている。この劇は1888年にボストンで，翌1889年にニューヨークで開幕したが，南北戦争の英雄シャーマン将軍の支持もあり，南北いずれにも組みしない態度も好感が持たれ，大成功をおさめた。時の文壇の大御所ハウエルズ（William Dean Howells）も「最初の瞬間から最後まで魅力」[6] とほめている。

ハウエリズ自身も劇作に手を染め，かなりの成功を収めている。大作は成功といえないが，学校やアマチュア・グループによって演じられる小笑劇（parlor farce）は大変人気があり，ハーパースなどの文芸雑誌は12月などにクリスマス用にハウエルズの作品をよく掲載した。例えば，訪れた英国人を叔父に紹介する手紙をめぐる一寸した誤解を描いた「紹介状」（A Letter of Introduction）（1892）などは方言をうまく使い，ジョークも上品で面白い。また教養人だけあって外国の作品からの翻案もおおい。

その他19世紀のアメリカ演劇の特徴と思える事柄をあげておこう。

伝統的な道徳教訓，社会矯正のための劇が興行的にも成功を収めていた事が第一に挙げられる。W.H. スミス（W.H. Smith）の「酔いどれ――救われた転落者」（The Drunkard or The Fallen Saved）（1844）が代表的なもので，主人公エドワード（Edward）は酒により没落するが貞淑な妻の献身と神の加護により救われるという典型的な勧善懲悪劇だが，転落も救われ方も不自然で，劇としては拙いものである。この劇が初演の時に100回を超える公演をし，その後全国到るところで，1878年までに450回も公演されたという。宗教心の篤い国だからこそ支持されたのであろうし，後の禁酒法への道は敷かれていたように思える。

時代を写しているという意味で面白いのがジェイムス・マックロスキィ（James McCloskey）の「大陸を超えて」（Across the Continent）（1970?）で，鉄道が西部へ伸びていくのを題材とし，インデアンの襲撃をうけると，実用化されて間のない電信を使った通報で，警備隊が汽車で駆けつけるといった当時の最新の技術を劇に採り入れている。客を呼ぶためならば，あらゆる手段を用

いたのも当時の風潮でオウガスティン・デエィリィ（Augustin Daly）の「ガス灯の下で」(Under the Gaslight)(1867）では本当の汽車を舞台に走らせ，線路に縛られて寝かされている人に迫っていくという髪の毛を逆立たせるようなショックを与える手法も使われた。「蝶々夫人」(Madame Butterfly）(1900）で有名なベラスコ（David Belasco）は電灯を使って舞台を照明した。

次に挙げたいのはコミックショーの流れである。ミンストレル・ショー(minstrel show)がその一つで，1769年にルイス・ハラマン(Lewis Hallaman)が酔っぱらいの黒人の真似をしたのが始まりとも言われ，アンドリュウ・アレン（Andrew Allen）のような黒人の演技者や，ジョージ・ニコルズ（George Nichols）のように黒人に扮して歌う人など先駆けは多いが，代表的な人物はジム・クロウ・ライス（Jim Crow "Rice"）で，1861年に死ぬまでいわゆるジム・クロウ・ダンスで人気を保ち，彼の模倣者も多く出たほどだった。

ミンストレル・ショーは普通二部からなっていて，第一部は舞台に一列に並んだ芸人の両端にいるエンド・メン（endmen）のタンボ（Tambo）とボーンズ（Bones）が中央にいる司会者（interlocutor）とタンバリンに合わせてジョークの掛け合いをする。第二部は全員が歌を唄ったりケイクウオーク(cakewalk）を踊りまわるオリオ（olio）という軽演劇で，度が過ぎる面もあったが，本当のコミック精神がこのショーを支えていて，デキシィ・ランドの音楽と共に大変な人気で，1884年には一週間に14，188ドル稼いだという記録もあり，1870年には50グループぐらいあり，2792回公演したグループもあった。

もう一つの人気を博したショーにマリガン・ガード（The Mulligan Guard）シリーズがある。自作のコミックな文をバンジョで弾き語りして，カルフォルニアからネバダの炭鉱を巡ってグループの一員であったエデワード・ハリガン(Edward Harrigan）がニューヨークの下町の生活に材をとって，愉快なアイルランド人を登場させアクションの多いマリガン・ガードという劇を1875年ごろに始めたが，大変好評で類似の題名の作品を次々と発表した。

娯楽的な演劇がブロードウェイの主流であったが，ヨーロッパでは1880年代より演劇改革の運動が始まっていた。パリの自由劇場（Théâtre Libre）や芸

術劇場（Théâtre des Arts）の旗挙げがあり，ストリンドベルグ（Strindberg）やバーナード・ショウ（George Bernard Shaw）が活躍を始めるが，この動きがアメリカで本当に起こるのはもう少し後になる。それについては稿を改めて述べるとして，前時代最後の大作家クライド・フィッチ（Clyde Fitch）のことに少々触れて，本稿を閉じたい。

1865年に生まれ，1890年ボウ・ブラマル（Beau Brummel）の上演で米演劇界における地位を築き，1909年に死ぬまでの20年間にわたり文字通りブロードウェイを席巻した作家で，どのような場所でも執筆できたそうで生涯60編の劇を書き，ある年には4つの彼の劇が同時に上演されていたこともあり，500人のニューヨークの劇場関係者がフィッチの劇で週一万ドル稼いだと言われる。嫉妬の心理に深く切り込んだ「緑の目をした少女」（The Girl with the Green Eyes）（1902）など娯楽だけでなく真実を描くことを目指す現代劇に近いものがあり，1909年彼の死の直後に公演された「大都市」（The City）は熱狂的に迎えられて興行的に大成功であっただけではなく，当時の社会問題であった地方都市と大都市の関係，とくにニューヨークが人々に及ぼす影響なども論じられ，20世紀の入口に位置し，1910年代のオニールなどの近代劇への橋渡しの役割を果たしている。1906年に公演されたバン・ムーディの「大分水嶺」（The Great Divide）と共に記念すべき作品である。

NOTES:

1) Charlotte: Man! for whom we dress, walk, dance, talk, lisp, languish, and smile.... Why, I'll undertake with one flirt of this hoop to bring more beaux to my feet in one week than the grave Maria, and her sentimental circle, can do, by sighing sentiment till their hairs are grey.

The Contrast by Royall Tyler, compiled in *Drama from the American Theatre* 1762–1909 ed. by Richard Moody (The World Publishing Company, New York, 1966) p. 34

2) "Warren did his duty... America – my country! bless thee heaven, O God protect this land – I faint – I die. Live the Republic. Live; O live, forever."

Bunker-Hill or The Death of General Warren by John Daly Burk, compiled in *Drama from the American Theatre* p. 85

3) 1984年10月27日　大阪アメリカン・センターにおける「19世紀のアメリカ演劇」研究集会での早稲田大学教授鈴木周二氏の発言による。

4) "It is thought, with the present state of theatrical performances in this country, that any attempt on the part of Christians to identify themselves with them will be productive of danger to the individual character, and to the general cause...."

Mrs. Stowe's reply to a request of her permission to prepare dramatization. *Dramas from the American Theatre* p. 350

5) "...there is much merit in *Fashion* and in many respects (and those of a telling character) it is superior to any American play. The entire getting-up was admirable. *Fashion*, upon the whole, well received by a large, fashionable, and critrical audience. Compared with the generality of modern dramas, it is a good play–compared with most American dramas it is a *very* good one,"

Broadway Journal March 29, 1845, compiled in *Dramas from the American Theatre* p. 309

6) "...Charm from first moment to last, and it has passage of nobility and beauty with effects that ravish the sense and kindle the fancy, by the legitiamte realization of facts that cannot be put into dialogue or action...."

Harper's June, 1890 compiled in *Dramas in the American Theatre* p. 573

BIBLIOGRAPHY:

作品集

Coyle, William and Harry G. Damaser, eds. *Six Early American Plays:* 1798–1890 Columbus, Ohio, 1968.

Moody, Richard, ed. *Dramas From American Theatre* 1762－1909. New York, 1966.

Moses, Montrose J., ed. *Representative Plays by American Dramatists.* 3 vols. New York, 1921, New York, 1964.

Quinn, Arthur Hobson, ed. *Representative American Plays.* New York, 1917 and 1957.

演劇史

Taubman, Howard, *The Making of the American Theatre.* London, 1967.

Quinn, Arthur Hobson, *A History of the American Drama from the Beginning to the Civil War.* New York, 1923 and 1943.

主要作品の上演年表

College Dialogues

An Exercise Containing A Dialogue and Ode (1762) by Francis Hopkinson

Dartmouth Dialogues (1783)

A Dialogue Between an Englishman and an Indian by John Smith

A Little Teatable Chitachat		by John Smith
The Prince of Parthia	(1767)	by Thomas Godfrey
The Candidates	(1798?)	by Colonel Robert Munford
The Contrast	(1793)	by Royall Tyler
Bunker-Hill or The Death of General Warren	(1797)	by John Daly Burk
The Glory of Columbia Her Yeomanry!	(1803)	by William Dunlap
A Trip to Niagara or Travellers in America	(1828)	by William Dunlap
Metamora or The Last of the Wampanoags	(1829)	by John Augustus Stone
The Siege of Yorktown	(1824)	by Mordecai M. Noah
Superstition	(1824)	by James N. Barker
The Forest Rose or American Farmers	(1825)	by Samuel Woodworth
The Gladiator	(1831)	by Robert Montgomery Bird
The Drunkard or The Fallen Saved	(1844)	by W. H. Smith
The Fashion	(1845)	by Anna Cora Mowatt
Uncle Tom's Cabin	(1852)	by George L. Aiken
Po-ca-hon-tas or The Gentle Savage	(1855)	by John Brougham
Francesca da Rimini	(1855)	by George Henry Boker
The Octoroon	(1865)	by Dion Boucicault

Minstrel Show (*Andrew Allen*, George Washington Dixon, George Nichols, Jim Crow "Rice", Dan Emmett and his Group of Four)

Across the Continent or Scenes from New York Life and the Pacific Railroad	(1870?)	by James J. McCloskey
The Mulligan Guard Ball	(1879)	by Edward Harrigan
Shenandoah	(1888)	by Bronson Howard
A Letter of Introduction	(1892)	by William Dean Howells
A Temperance Town	(1892)	by Charles H. Hoyt
Margaret Fleming	(1890?)	by James A. Herne
Shore Acres	(1893)	by James A. Herne
Griffith Devenport	(1899)	by James A. Herne